

# 三島 日本大学 同窓会々報

第 3 号

昭和48年11月3日  
静岡県三島市文教町2  
日本大学三島同窓会発行



第22回大学祭

## 昭和四十七年総会開催さる

会長に種房 繁氏再選

日本大学三島同窓会昭和四十七年度総会並びに懇親会は、母校日本大学三島大学祭第二日目の十一月三日、百余名の会員を集めて三島学園記念館で盛大に開催された。

総会は午後三時から行なわれ、種房会長の挨拶の後、奥田吉郎氏を議長に選び議事にはいり、次の事項を可決した。

- 一、前年度事業報告について
- 一、前年度決算報告について
- 一、本年度事業計画について
- 一、本年度予算案について
- (以上8頁参照)

役員改選について  
会長、副会長、事務局長については、いずれも万場一致で次の三氏を選出した。なお、幹事の選出は三氏に一任した。

会長 種房 繁氏  
副会長 奥田 吉郎氏  
事務局長 瀬川 一男氏  
また、会計監査に次の二氏を選出した。  
会計監査 持田 光雄氏  
室伏 みほ子氏



昭和47年度総会風景

一、その他  
会費改正問題に関しては会長から大学当局に確認する。

### 予科出身者の集い

三島予科出身者の集いが四月十四日(土)午後三時から、三島市内「呉竹」で開催された。新制大学発足とともに予科が廃止されて以来二十四年ぶりの集まりとあって北海道から九州まで、期別、クラス別に關係なく広い層の集まりで、総勢百余名となり、母校の先生方をまじえて昔話に花を咲かせて盛大な会であった。これまで予科出身者はクラス別やグループ別の集まりはあったが、この様な集いは初めてであり、今後が期待される。

なお、この会を推進した発起人は次の諸氏である。(敬称略)  
米内国夫、井内亮治、高橋文吉、渡辺清八郎、太原道敏、北條晃、北村和夫、中浜卓彌、池上昭三、佐々木康正

### 桜栄会総会と懇親会開催される

第十二回桜栄会総会は三月十八日午後一時三十分から、三島市内レストラン「じゅん」において開催された。総会に続いて懇親会が行なわれたが、母校より、山本、岩田、小佐野、斎藤、佐藤の諸先生方を迎え、会員百余名の出席があり、盛会のうちに一年ぶりの対面を喜び合った。

### 桜文会総会並びに懇親会開催される

第三回桜文会総会は三月二十一日午後一時から、三島市内「じゅん」において会員五十名が出席して行なわれた。総会に引き続き懇親会が多数の先生方を迎えてなごやかな一時をすごした。



同窓会の皆様、元気に御活躍ですか。

時の流れは早いもので、皆様が三島学園を出られてから幾星霜を経られているのでございましょうか。私は三島を巣立ちましてより早二十三年を経っております。それぞれの方々にとって、それぞれ過ぎ去りました年月は違いますが、母校は私共の青春の思い出として又三島は思い出の地として懐しいのは互に変らないものと思っております。

啄木の詩ではありませんが「故郷は遠きにおいて想ふもの」とは若干のニュアンスの違いがある様に思います。現在の三島学園の歴史から云いまして、早い時期の卒業生の方は所謂「男四十代は働き盛り」の年頃の方々です。従って、油が乗り切って会社勤めに、自家営業に、又役所勤めにそれぞれの方々にとっては母校は丁度「行きたくとも行けない」所の一つではないでしょうか。

私共は、同窓会の活動の一つの事業として、こうした忙しい同窓の方々とは本校を通じて広く手をつなぎ、現在切れているお互いの絆をとり戻そうと努力致しております。はからずも昨年十一月三日、母校三島学園内の記念館で行われた同窓会定時総会に於いて、会長に再任された私にとりましては、此の事は極めて大きな責任の一つと考えております。特に、数百年の社会構造の改革は、極めてきびしいものがあり、従いまして現在私

共がやっている、在学当時の学籍簿を頼りにして、出身地にハガキを出して、同窓生の御住所を探して会報を送るという方法で、横の連絡をとるのは極めて困難な仕事であります。一人でも多くの方々と連絡をとり、お互いの近況について知り度い、教え合い度いと考えているのです。然し、此の方法は原子力のエネルギーを平和利用され、人間の月世界の探訪が可能な時代、極めて幼稚で満足すべきものでない事は充分判っている事です。といってもマスコミを利用



種房 繁

## 皆んなで

### 手を繋ごう

する程の資金はありません。そこで皆様方をお願いしたいのは、本報をご覧戴いた方が、それぞれの交友達の現住所を、本報表記の同窓会事務局へお知らせ戴ければ幸いですと存じます。寧ろ、友人の輪を拡げて戴く運動と申しますか、お互いごく親しい友人は今でも交際がある訳ですから、先ずその人達の名前と住所をお知らせ戴けませんか。又、親しい友人間で出た他の同窓知人の現況、或いは、お勤め先などを一報賜ればこの仕事ももっと早く、その輪を大きくする

一杯に咲き誇って居ります。昨今東海道新幹線で、三島辺りを過ぎられる皆様の眼に入る風景は、丁度学校の裏手から箱根にかけて、全く昔日の面影なく、分譲住宅地化しているのを見られて、嘆かれ筋も多いのではないかと思います。皆様に若し三島学園を訪れて戴いたら、皆様方を昔変らぬ姿で迎え、然も、皆様にお前は元気だったのか、大きくなったな！と云わせ、且つ又、矢張り三島に來て良かった。矢張り三島は残っていたな！、と云った感懐と、絶

事が可能ですし、学校、同窓生、同窓会相互の繋りが回復すると共に、お互いの社会的靱帯もより大きく強くする事も可能だと考える次第です。今日、公害とか、社会開発の悪影響とか、大変喧しく取沙汰されている時であります。私共の青春の地であった三島学園の校庭には、これらの諸公害も襲って来ておりません。遠く眺める白雪の富士もそのままです。春三月爛漫と咲く桜の花盛りも昔の通りです。又五月は、つつじが校庭

叫を挙げさせるのに充分なものが未だ三島には残っております。それは、あの懐しい銀杏並木の諸君です。昔よりも大きく、太く、亭々として梢を空に伸ばし、枝を道一杯に張り拡げて皆様方を迎える事でしょう。今様の道路拡張、排気ガスと云った自動車公害の時代に良く元気で頑張ってくれていると思います。私も三島へ参り、あの銀杏並木にさしかかり、ずっと先を見通した時に、遙かに遠くの方に並木の終りが見えるか、見えないかといった、即ち画法で謂うならば、黄金分割的な均整のとれた遠近景を見た時、しみじみと「三島へ来たな！」といった気持ちにおそわれます。

銀杏並木は、三島学園のシンボルです。日常多忙な皆様ですが、もし出来ましたならば一度母校をお訪ね下さい。幸い校内は、種々新しい建物が林立して、可成りの面影の変化はありますが、旧事務所の建物が記念会館として残っているの、古い卒業生の方々には色々の手続きに訪れた懐しい建物の姿を、昔のままの形に見る事も可能です。

学生課長の瀬川先生が同窓会の事務局局長を兼ねて下さっているのでお立寄り下さい。又、安藤先生鈴木昇六先生、玉津先生、三好先生ほか諸先生の懐しいお顔にも接する事が出来ます。何時もみんなが楽しく母校を訪れることの出来る様、互の絆をより強くしたいと希っております。

(日本大学三島同窓会長)

## 種房 繁会長略歴

出身地 北海道 昭和四年三月十六日生

現住所 東京都目黒区上目黒四一七七一三

昭和二十二年四月、日本大学三島予科文科入学。

昭和二十七年三月、日本大学法学部法律学科卒業。

昭和二十七年四月、東洋醸造株式会社入社。

昭和四十七年二月、同社大阪支店長に就任し現在に至る。

東洋醸造入社以来、大阪支店長就任までの間、ずっと同社の薬品営業畑を歩き、同社薬品営業の今日の大発展のため活躍してきた。

また、三島学園の学生時代は自治会委員、考古学研究会員として活躍し、昭和二十四年度は紛争後の学友会再建の中心になり、同学会計監査として活躍した。法学部移行後は全日大雄弁会副幹事長として活躍し、関東大学雄弁連盟の再建に成功し、その副委員長を務めた。



# 「坊っちゃん」の町に生れる

私の故郷は四国の松山である。

私は松山城の北側の練兵場に近しい通町（とおりちよう）で生まれ市のほぼ中央の三番町で育った。

母は私が小学校六年生のとき、脳溢血で倒れ、不自由な身体となつたが、元気なころは文学好きでよく少年むきの小説を読んでくれた。

「お前の生まれた通町のこと、夏目漱石の『坊っちゃん』に出ています。坊っちゃん、松山にきて最初に泊った山城屋はこの三番町の城戸屋がそのモデルですよ。」

そういつて母は私を城戸屋旅館から通町まで連れていってくれた。私の生まれた通町のことを漱石は「坊っちゃん」で、「帰りに山嵐は通町で氷水を一杯奢った。」とたった一行書いていただけである。

しかし母が通町の角の氷屋で白玉とあずきのはいった氷水を御馳走してくれてこの前後の文章を読んでくれたときは、子供心にも漱石と親戚になったようで嬉しかった。以後私は漱石の作品を愛読するようになった。

母はまた松山出身の正岡子規や河東碧梧桐の話をして、「お前には文学者の血が流れています。」と励ましてくれた。母は旧姓を河東通子といい碧梧桐の遠縁であった。母はよく私を連れて今治市で眼科の医師をしている母方の祖父

河東高之の家へ出かけた。私はここで碧梧桐の思い出を聞いた。

私の生家は代々松山藩士をしており、父は早大法学部出身の銀行員であったからどちらかといえば家庭は堅苦しい雰囲気であったが、私はこの母親のおかげで早くから文学に親しむことができた。

## 文学全集を乱読

私は小学校を終えると私立北予中学校に入学した。これは父が松山出身の軍人で陸軍大将となった秋山好古を尊敬していたので、こ



岩城之徳

## わが読書遍歴

の將軍が校長を勤めた北予中学校に私の教育をたくしたのである。秋山好古（よしふる）はいうまでもなく司馬遼太郎の、「坂の上の雲」の主人公で、弟の海軍中將秋山真之と共に日露戦争を勝利に導いた人物である。彼は正十三年二月から昭和五年まで郷里の私立中学校長となり、子弟の教育に余生を捧げた。私が入学したころはすでにこの世を去っていたが、秋山校長によってつちかわれた「立志の気風」は伝統精神とした

て受け継がれ、生徒たちは若き日の秋山兄弟をみならって青雲の志にもえた。しかし私が入学した翌年この学校は県立に移管されたため校風は一変し、昭和十年代の次第に高まる軍国主義の風潮のなかで、創立以来の自由で闊達な私学精神は学園からその姿を消した。私はそうした反動的な空気に抵抗するように学業を怠け、教練をサボっては毎日小説ばかり読んでいた。学校から帰ると近所の貸本屋で新刊の小説から文学全集、講談全集の類まで手当たり次第に借り

出して乱読した。そのため学業は低下したが私の文学への接近は決定的なものとなり、中学の卒業をまたず四年修了の資格で日本大学文学部予科に進学した。大学で国文学を専攻したことはいうまでもない。

## 啄木研究に志す

私が石川啄木の研究に志したのは二十七歳のときであるから、今年には満二十三年目にあたる。思えば永い年月啄木と哀愁を共にしたものである。私を啄木に結びつけたのは、昭和二十三年の秋から翌

年の春にかけて出版された世界評論社版「石川啄木日記」である。そのころ日本大学の国文学科を出てまもない私は、札幌から電車で一時間ばかりの北海道立岩見沢女子高等学校に赴任し、なれない国語の授業に憂鬱をやつしていたが、東京を遠く離れた孤独と焦燥はおおうべくもなく、生活的にも思想的にも戦後の混沌を脱し得ない毎日であった。この時期私の心を慰め勇気づけたのは前述の「石川啄木日記」全三巻である。私はこの書物に導かれて近代文学への関心を深め、内地離れをした美しい北緯四十度圏の自然のなかに、新しい人間の生き方を模索した。

風巻景次郎教授の学風を慕って北海道大学に学び、大学院で本格的に石川啄木の研究に携ったのは、それからまもない昭和二十五年のことである。こうして文学研究者のコースを歩んだ私にとって、世界評論社版『石川啄木日記』は青春の忘れがたい記念碑となった。

啄木日記はその没後三十五年間市立函館図書館に秘蔵されたが、それを公刊にふみきつたのは啄木の義嗣子石川正雄氏で、版權所有者である同氏の決断によって、啄木が盛岡中学校を退学して上京する十七歳の秋から東京市小石川区久堅町の借家に窮死する直前までの約十年間の日記の全文が初めて明らかにされたのである。一般に先駆的な文学者や短詩型の作家にとって伝記は重要であり、すぐれ

た伝記の完成は同時に文学研究そのものの発展を促さずにはおかぬが、このいわば啄木の自伝ともいうべき日記の公刊は、戦後における啄木研究の飛躍的な前進をなす契機となった。そのころ私が愛読した啄木の文獻には、金田一京助『石川啄木』、土岐善麿『啄木追懷』、吉田弘羊『啄木を繞る人々』などがあり、いずれも示唆に富む有益な書物であったが、私はこれら戦前の啄木研究を代表する著作を丹念に読んで、啄木日記と比較した結果、日記に報告されながら従来の研究書に見られない幸徳秋水らの大逆事件と啄木の関係に焦点をあてることにし、函館の宮崎郁雨氏の援助で函館図書館に所蔵する大逆事件関係の手記を閲覧することができ、その結果にもつて、「幸徳秋水事件と啄木晩年の思想」と題する論文を書いた。昭和二十六年三月一日のことである。

こうして世界評論社版『石川啄木日記』を出発点とした私の啄木研究は、二十数年にわたり『石川啄木伝』（東宝書房）から最近の講談社文庫『一握の砂・悲しき玩具』まで貳拾数冊の著作を世に送った。

私どもの人生には、その生涯の方向を決定するような書物がときたまあるもので、青年時代はそれをさがすが大切な仕事なのである。

（文理学部三島学生部長）



## 思い出すままに



食糧難とインフレのダブルパンチに進級をあきらめて国に帰るものが続出した時代である。たしか入学当初（昭和22年4月）は、月二、〇〇〇円位のしおくりでよかったのが、三島最後の頃（昭和25年3月）は七、〇〇〇円位かかった。「生活することが経済学だ」とこぼしたことを今もって憶えている。

Hクラス（仏語科）には毛いろの変わった者が多かった。私もその一人。実業学校からの進学組で、一人一人の個性が強くユニークで、考え方もまちまちであったので、よく夜を徹して議論したものである。このもてあました暇が、今は大変貴重な思い出となった。

在学中で一番の思い出と言え、何といっても昭和24年（10月9日・10日）の記念祭である。これは本学六十周年と三島教養部の設置を記念して催されたものであって後年の大学祭のはしりで大変盛大に行なわれた。

この日こそは日頃の空腹を忘れてあばれ廻った。記念祭は式典について祝賀会・交換パーティーが催され、展示会場は各室思考をこ

## 水野瀬市

らし、自然科学、人文科学、社会科学、郷土自慢展、美術展、写真展、切手展など多彩をきわめた。芸能祭（演劇の部）は、校外の新日（新日本劇場）にもちこみ、「日本の河童」（伊藤貞助作）、「榎の木蔭の欲望」（ユージン・オニール）が上演された。

「日本の河童」は、キャストに河童（岩田千津子）、行者（清水不二雄）、龍造（谷口鉄生）、おつる（木村志津子）、村長（清水正昭）の諸君でした。

「榎の木蔭の欲望」は、キャストにガボット（瀬川治）、アビ（永井美千代）、エベン（北村和夫）、シメオン（灰原一彦）、ピター（土屋正）、楽士（高野憲晟）の諸君、演出はいずれも子安弘男君でした。

部員のほとんどがHクラスで占められていたように、Hクラスは大変はりきり者ばかりでした。「アビ」役の永井美千代さん、日頃目立たないおとなしい人ですが、体あたり演技で「アビ」をやり、すっかり「アビ」になりました。永井さんを見て、人が違うのではなにかと目を疑ったことを、昨日のように思い出します。

この頃を境いに学内の雰囲気もうんと変わって来て、明るくなっ

たように記憶している。思い出は次々と、たぐる糸のように出て来てつきるところがありません。予定の紙面を越えたのでやめます。終りに母校と日大三島同窓会の発展を祈ります。（昭和22・23・24年度在学、水野印刷代表者）

## 第二の故郷



水と緑と太陽の町、三島市に居住するようになったきっかけは、私の場合日大三島校舎入学に起因する。郷里熊本から向学心に燃えてきたものの、ガラス窓は破損し雨もれはひどい兵舎然とした校舎を見た時、なんだか淋しい気持ちがしてならなかった。何故三島校舎

## 校友であることの喜び

## 国米増次郎

もう三島を出てから十七年にもなると云うのにやはり母校と云うものの懐かしさのせいだろなか、今はもう古い兵舎の跡もなく近代的な学舎が大学の隆盛を想わせる。

文化祭の時、武藤国臣部長の指導のもとに朗吟部の発表大会を行ったこと、体育祭の相撲大会で五人技をやったあと、瀬川一男先生に相撲部に勧誘された時のこと、その当時のクラブ活動は今でも忘れることの出来ない思い出となつて母校愛を募らせてくれる。そういえば我々のクラスはLC（統合

## 田村實

にきたのか！然し氣候、風土、産物、人情に恵まれたこの地にささやかではあるが幸せを求め、第二の故郷として住みついた今、若い情熱を育んでいただいた諸先生や周囲の親切に心から感謝せざるを得ません。昨今、勤務する会社では人材の開発と育成の見地から奨学金制度が設けられており、現在短大・二部に奨学生社員が学んでおります。よい校風の輪がひろがって行くのを楽しみにしております。当時をかえりみれば、勉学は専ら司法試験に向けられ七人の侍の同志として励み、大学祭で模範裁判に出演し女装姿で市中を練

り歩き県大会では、九州男児の心意気を示したり、女学生を見染めては胸の動悸を覚えたりしたものだ。また学生の本分を逸脱しては大いに羽根も伸ばした。『オクトレ』この電報で素直に夢を乗せてくるのが軍資金であった。使い込んでは適当に処理する心得もあった。冬のある夜、一杯やって門限の九時を過ぎた真夜中、下宿屋に帰宅したものの家に入れてくれない。外は寒いしこのままでは男の意地がすたると炭俵に身を沈め、玄関鼻先で一夜を過した。翌朝炭俵から飛び出した真っ黒い顔姿におばさんは腰を抜かし門限を一時間延長してくれた。

我が青春を謳歌したよき時代の思い出は数多くつきない。たまに日大通りを歩く時、懐古の念にうたれ整備発展して行くキャンパスに拍手をおくる次第です。

（昭和26・27年度在学、丸善工業株式会社経理課長）

クラス）クラスと云って安藤先生を担任として学園でも初めてを試みとして、同一のテーマに対して社会学の斎藤教授と歴史学の蔵並教授との総合的な講義が行われたり一時間毎に安藤教授の心理学と玉津教授の倫理学の講義を受けたり誠に変わった方法で講義を受けたものである。物事を色々な角度から観察し、研究し、判断する力を付けることが目的であるとも聞いたが、こういった形でのクラスがその後設けられたかどうかは聞いていない。我々は同じ期間中に他の人問性に接することが出来たことは確かであり、そのことが私にとつては最も価値の高い事のように思われる。今でもそのような教育を受けた誇りと恵まれたものとしての感謝とを禁じ得ない。そのことが学園を訪れる度に入学式と





紛争中の泊り込み風景

同じような緊張を覚えさせるのではなからうか。時代の流れとは云え、学園紛争になど振廻されないので、本当に学園を懐かしめる思いを出を作ることこそ学生生活に取って一番大切なことではないかと思

う。  
学園が益々発展し、いつまでも我々の誇りであるように、念願する。  
(昭29・30年度在学、ホテル司本店専務、阿蘇の司担当)

## 紛争当時を振り返って

浪川 徳昭

私が商経科二部の二年に在学中のとき、日本中を揺した日大紛争

が起った。二部学生は自分自身で学費を稼ぎ、他の一般サラリーマンが家庭でくつろぐ時間に机に向い、先生の講義を聞くという、それぞれ目的をもって通学している者が多い。そのような事情のもとに、当時、二部学生会の委員長だった私は、二部学生の権利を守るために八号館を自主管理することにし、泊込みを始め、自主講座の名のもとに先生方をお招きし、各種の講義を受けることができた

た。当時、先生を教室に招き講義を聞くことができたのは、日大全学部を通じて、我が三島商経科二部だけではなかったかと誇りに思っています。これも、陰で応援して下さった学校当局や同窓会の援助がなくてはとてもできなかったものと、改めてこの紙面を借りて厚くお礼申し上げます。  
半年間の泊込みには数限りない思い出がありますが、中でも寝食を共にした仲間達との友情、急造のイスのベッド、熱のこもった先生方の講義、全共闘との深夜に

わたる計(短大連合・全共闘との三者会談、二度にわたる全共闘の八号館襲撃事件、学外での自主講座、学園集会実行委員会(結局集会はできず)など今だに忘れられないことばかりです。  
この半年間の泊込みから学んだことは、自分自身ではなく他人に誠実であれということです。現在もこの言葉をモットーにして、毎日仕事に励んでおります。  
(昭43・44年度商経科二部在学、東洋醸造株式会社勤務)

## 目的ある人生



松下 敬子

ざいます。それというのも、この大学祭の中から教えられたいろいろな事が、今の私の人生観となっているからなのです。  
大学に入学した当時の生活は、あまりにも単純過ぎました。高校時代、水泳で国体まで行った私にとって、自由な時間を、どの様な形で過ごしたら良いのかわかりませんでした。しかし、二年の時、クラス委員連絡会議の一人として同じ仲間が、同じ目的を持って行

動するといった事がわかった私は水を得た魚の様に、イキイキとした毎日を過ごす事ができたのです。入学当時の目的であった、家庭の学問、それにつながる、人間同志の会話の尊さも自分のものになりました。  
「目的を持った人間は、持たない人間よりはるかに強い」  
卒業後、浜松で家業の食堂を手伝っている私ですが、大学時代に学んだ「目的を持った人生」を忘れた事はありません。マンネリ化した生活の中に、チョットした目的を自分の気持ちの上で持つ事が大切だと思っています。私も、そろそろ大きな目的(もちろん、お嫁さんに行く事)を持たなくてはと思っているのですが、「短大卒じゃあ、まだまだいいよ」という言葉に、甘えて安心しております。……といっても、チョッピリ負けおしみな……?  
一度しかない人生を張りのあるものにすることを、毎日、毎日を大切に過ごして行きたいと思っております。  
先輩、及び同級生の皆さん頑張らましようね。お互いに……私も早く自分のお城を作る様頑張ります。  
(昭44・45年度家政科在学、家事見習)



## 第13次日本南極地域

## 観測隊に参加して



内 藤 正 昭

日本大学南極建築設計委員会は南極観測用建物を第8次以降設計してきた。私もそのメンバーに加わり、基地建物の現状と今後の設計資料を得ることも兼ね、第13

次観測隊の建築担当者として参加した。設計した建物、自らの手で施工するということがあったが、私は実際に建物施工を経験したことがなく、総て学校で学んだ知識を基に昭和基地建物の施工を行わなければならず、本心はやや心配であった。基地では一棟の移築と二棟の新築を行った。基地作業は平均気温マイナス十五度、プラス五度。グリザートによる作業休止。さらに今回も「ふじ」が昭和基地への接岸がならず、総ての物

資輸送がヘリコプターに限られ、建設資材の搬入上の制約も生じた。夏季の二か月程の間に総ての建設作業を終了させるための工程管理や作業員の配置計画。半素人の隊員による建設で、機械使用の制約もあり、人海戦法が多々取入れられ、国内作業では想像つかぬものであった。しかし越冬隊員が越冬生活をするに自由のないよう建物の新築や付属物・既存建物の補修・種々の調査や資料を得ることができた。つらい毎日ではあったが時折訪れるペンギンや、オーロラに励まされ、自分の責務を果たすことができた。今回の体験は未知世界への踏破と、閉鎖社会での人間関係の協調と和の重要さ、多くの人々との接触は、私の人生に大きな一頁として飾られるものであった。

(昭和39年度在学、日本大学三島校舎建築科助手)

## 学び得たもの

田 中 義 人

今、こうして自分の過した学生時代を振り返って見て、どんなにかあの時代が今の自分にとって貴重であり、素晴らしいものであったかが甦ってきます。



の東京での学生生活の基礎になりえた事に対して、今まで経験した事のない多くの事を得る事が出来ました。それは自治会・寮を中心とするもので大学で直接学んだ学科目からは、少々離れたものではありましたが、一つの場の中で得た関係はもろもろの問題を生みだしました。抽象的にはなりませんが、我々新しい事に対処する時には、不安と期待が入り混じ合うものですが、それを恐れずに立ち向うならば結果がどうであれ、そこには多くの友、師がいたという事で、つまり、大きな時流の中

で、今しか出来ない事、又自分の青年時代今しか出来ない事を見出し、それに勇気を持って立ち向うならば条件がどうであれ、自分の位置がわかり、目標が、夢がたとえ大きくともそれに向っての一步一歩前進出来る喜びは、誠に素晴らしい事ではないかと思えます。そして、数多くの失敗の中で、次の事を感じ、又行って行きたいと考えています。一つには一人では何も出来ないという事、人を愛する事の素晴らしさ、又求めればそこには友がいて師がいるという事です。そして良い本を少しでも多く読み、一人でも多くの友、師を知り、かつ得る事が、今の自分にとって特に重要であるという事を感じ、日々を送っております。

(昭和40年度在学、東海神栄電子工業KK専務)

## 後輩のための同窓会事業

現在行なわれている同窓会の事業のうち、母校三島学園に在学する後輩のため行なっている事業の主なものとは次の二つである。

一名分が金二万円である。

最近の支給者は次の諸君である。

昭和四十七年三月、(卒業式当日) 授与

短大文 科 杉浦美恵子

商経科 久保田博明

家政科 橋本 睦

工 科 菅野 利幸

商経科(二部)

庄司 章

昭和四十七年度新入生全員に入学祝として配布された。全部で百八十二頁で百八十六の歌が編集されている。うち、学園歌は十六で楽譜付である。発行部数三千部で総額五十八万八千円であった。

(日) 授与

法学部 猿田 明

商学部 日吉 輝美

昭和四十八年三月(卒業式当日) 授与

(日) 授与

短大文 科 牧野 和代

商経科 加藤 久貴

家政科 八木ふじ世

工 科 河田 哲雄

商経科(二部)

太田 輝男

## 一、奨学金支給

昭和三十三年から行なわれており、現在まで六十一名の後輩に支給された。金額は一時金で



風 第22回大学祭 景 祭



開会宣言



記念音楽会



4号館展示会場

回想の学園生活アルバム



市中パレード (昭35)



郷土展 (昭41)

# 昭和46年度収支決算書

(昭和46年4月1日～昭和47年3月31日)

(単位 円)

支 出		収 入	
項 目	金 額	項 目	金 額
奨学金 (@ 20,000×9名)	180,000	会 費 収 入	615,600
学 園 歌 集 発 行 費	120,000	4 5 年 度 729名	145,800
各 科 同 窓 会 祝 儀 等	15,000	4 6 年 度 2,349名	469,800
同 窓 会 報 発 行 費 (1号)	45,000	利 息 収 入	273,860
総会並びに記念祝賀会費	82,555		
会 議 会 合 費	3,420		
通 信 運 搬 費	29,970		
雑 費 (消耗品、慶 弔、雑 費)	41,440		
計	517,385	計	889,460
基 金 繰 入 額	3,957	基 金 取 崩 額	0
次 年 度 繰 越 金	368,118		
合 計	889,460	合 計	889,460

## 貸 借 対 照 表

(昭和47年3月31日現在)

(単位 円)

借 方		貸 方	
項 目	金 額	項 目	金 額
普 通 預 金	428,118	基 金	5,560,000
定 期 預 金	5,500,000	前 年 度 繰 越 額	5,556,043
		当 年 度 繰 入 額	3,957
		次 年 度 繰 越 金	368,118
合 計	5,928,118	合 計	5,928,118

# 昭和47年度収支予算書

(昭和47年4月1日～昭和48年3月31日)

(単位 円)

支 出		収 入	
項 目	金 額	項 目	金 額
奨学金 (@ 20,000×9名)	180,000	会 費 収 入 (3,100名)	620,000
学 園 歌 集 発 行 費	590,000	利 息 収 入	320,000
同 窓 会 報 発 行 費	170,000		
各 科 同 窓 会 補 助 費	50,000		
総会並びに懇親会費	100,000		
会 議 会 合 費	20,000		
通 信 運 搬 費	40,000		
三島学園創立25周年記念事業費	100,000		
雑費 (消耗品、旅費、慶弔、雑費)	58,118		
計	1,308,118	計	940,000
次 年 度 繰 越 金	0	前 年 度 繰 越 金	368,118
合 計	1,308,118	合 計	1,308,118